



大名行列は何人だったの

行列の人数は決められていた

大名たちは、1年おきに国元（自分の支配する国）と江戸（将軍のいるところ）を往来するように定められていました。これを参勤交代といいます。このとき、行列を組んで進んでいったのです。この行列を組むときの人数は、幕府が決めていました。つまり、大名の家格によって、武器などの持ち物や、お供の人数が定められていたのです。ふつうは150人～300人ぐらいでしたが、石高100万石の加賀藩の大名行列は、4000人にも達したといわれています。ほかにも2000人～3000人ものお供を引き連れた、大名もいました。

1721年の資料によりますと、行列の人数は、20万石以上の大名は、騎馬が15～20騎、足軽が120～130人、中間人足が250～300人と定められていました。そのほか、10万石以上の大名、5万石以上の大名、1万石以上の大名というように、家格に応じて、それぞれ行列の人数が定められていました。そして実際の大名行列の人数は、決められた人数よりずっと多かったようです。

参勤交代でお金を使い果たして、貧乏になった大名

参勤交代で、大名が江戸と国元を往来するには、たいへんお金がかかりました。肥前藩の資料（1655年のもの）によると、藩の収入の約5パーセントを国元で、約30パーセントを江戸の屋敷で、約20パーセントを参勤交代の費用に使いました。大名は、江戸と国元との二重生活に大金を使い、さらに参勤交代のために大金を使ったので、やがてたいへんお金に困るようになってしまいました。中には、参勤交代のとちゅう、宿代が払えずに、立ち往生した大名もいたほどです。（監修・田代 脩）

